クロード・ロベルジュ先生の遺稿に係るレビュー
(“話し言葉”について)

Review for last work of Professor Claude Roberge
Spoken language : La parole(French)

安　昭八*
Shohachi YASU

Abstract: Until just before the death of Professor Emeritus Claude Roberge of the Faculty of Foreign Languages, Sophia University who died in September 2019, he would like to summarize the educational methods related to foreign language education. It was “La parole”, one of the many research results of the late Professor Petal Guberina. The theory described in this paper was consistent with the “spoken language” received from Roberge’s mother in Canada during his childhood and the theory was consistent with the result gained from his experience teaching French to kindergarten children after his retirement from Sophia University.
Key word: Foreign Language, La parole, Teaching method, French, Sophia University

１．はじめに

2019 年 9 月に帰天された上智大学外国語学部名誉教授のクロード・ロベルジュ先生が亡くなる直前まで, まとめようとした外国語教育に係わる教育方法についての考え方を筆者なりに理解したことを紹介したい。その教育方法は, ロベルジュ先生の師であるクロアチアのザブレブ言語教育の故ペタール・グベリナ教授の数多くの研究成果の一つである“話し言葉 : *La parole* ”であった。この論文で記述されている理論がロベルジュ先生のカナダでの幼少期に母親から受けた“話し言葉”や上智大学リタイア後に, 幼稚園児にフランス語教育をした体験により得られた道理と合致していることを後年気付いたと筆者に紹介してくれた。本稿ではその考え方をまとめたものである。

２．ロベルジュ先生の功績

2.1　Sound comes from movement について

ロベルジュ先生は, 外国語教育に携った約 50 年間, 生徒には理論よりもグベリナ教授が推奨したことば「Sound comes from movement」を外国語教育に適用してきた。上智大学フランス語学科一年生に初めてのフランス語授業をどのようにすべきか熟慮していた時, ロベルジュ先生が子供の頃, 先生の母親が子供達を寝かせる前に口癖のように「ピピ, ロロ, ドド」(おしっこ, 水を飲む, 寝なさい) のリズムを思い出し, 腕を伸ばすことによりフランス語のリズム感が身体の動きで表せると感じた。さらにパリで購入したフランス語のわらべうたの本を開いたところ, 全く偶然に「Bibi Lolo」のわらべうたがあり, 「ピピ・ロロ」のニュアンスに似ていることもあり, その歌詞を独唱した時に片腕を胸の前で廻して, 最後にその片腕を横に広げ手先を伸ばす動きを入れて発声するとフランス語のリズム感が腕の動きで表し得ることを体験した。初めての授業でその「Bibi Lolo」のわらべうたを題材にしてフランス語の緊張感や強弱などを腕の振りで表し, 新入生にその身振り・発声を真似させる教育を行ってきた。その結果, 新入生の発声も徐々にフランス語らしいリズム・イントネーションに変わってくるのを体験された。初期の内は同類のわらべうたを題材にし慣れさせ、逐次題材の長さ・難易度を高め, 日常会話を題材にすることを実践してきた。その内容については 2016 年度上智大学外国語学部紀要に論文名「日本で外国語を教えて 50 年」[1)]に掲載されている。母国語以外の外国語を初めて教える際に, 最も大切なことは文法論でなく, 人間性に基づいたリズム・イントネーション等の動きを伴った言語教育が有効であると云うことは筆者にとって自然と理解できた。また, 日本の某医療器具メーカのコマーシャルで流れていた内容 : 幼児が母親に抱かれ、“痛いの, 痛いの, 飛んでケー” , “pain ,pain ,go away!”, 他言語もある : とのあやす声で母親が幼児の身体を揺すりながら, 緩やかなリズムに合わせて幼児の背中に手を当てて慰めている映像・音声があった。これは母親から幼児への母国語による愛情と人間的なコミュニケーションを図るものであり, 幼児は母親のリズム・イントネーション・身体の動きを自然に身に付けることにより母国語を習

2021 年 5 月 8 日受理
*　総合技術研究所

得していく。これは正にグベリナ教授の理論で述べているように母親と幼児との自然な社交な場面で話し言葉によるコミュニケーション力を付けているとも云える。外国語を初めて習う初学生にとっては、幼児が母親から話し言葉を習得する場面と全く同一であることを考慮すると, グベリナ教授が推奨した Sound comes from movement は論理的で自然な形であると思われる。

2.2　幼稚園児へのフランス語教育

ロベルジュ先生, 他執筆者が子供に英語を教えるために刊行した「ロベ先生とはじめての英語」の絵本 [2)]には, 各章のタイトル以外いっさい文字を使っていないため, フランス語の第一段階の学習教材としても使える。

ロベルジュ先生は, 先生の教え子からお孫さんにフランス語を教えてほしいとの依頼で, この教材を使って小学校低学年以下の児童 4 名にフランス語を教えた。児童らはそれまでフランス語の学習経験はなく, 週 1 回, 1 時間半ほどのレッスンの他は, 絵本は家に持ち帰らず, 家庭や学校でフランス語に触れる機会は皆無であった。レッスンでは日本語での説明は一切せず, ただ絵本を見せて, 絵を指さしながら言葉を聞かせ, 同じ言葉を繰り返させるだけであった。幼児教育の基本である誤りを指摘することや叱責することは一切しなかった。1 年ほどで児童は導入 2 章, 本編 17 章の全てのページを諳んじることができた。引続きレッスンを続けたいとの意向があり, 同じ絵本を使って, 言葉の入れ替えやクイズに答えさせるレッスンを 1 年半続けた経験がある。小学校低学年までの年齢であれば, 声を出しながら自然に身体が動くため, わらべうたのリズムを体感させる身体の動作をわざわざさせる必要がなく, 極めて自然なフランス語のリズムとイントネーション, 正確な発音が身につくことを体験された。

子供に対する指導では, 特に留意すべき点があるとロベルジュ先生は述べていた。第一に, 絵を見せて前回までに覚えた語句から始めるなどして, 既知の情報からくる安心感を常に与えること。第二に, 繰り返しを厭わないこと。リズムが快ければ子供は繰り返しを苦にせず, むしろ楽しい遊びのように捉える。さらに, 自由な動きを禁ずる, 強圧的・一方的な指導をしないことが肝要である。笑ったり楽しんだりしながら自発的に動けば, どのような動きであっても子供はあらゆる言語の自然なリズムとイントネーションを身に付ける能力を備えている。これはグベリナ教授の教育法を実践し, 幼児教育という大学生とは異なった分野でも効果があることを体験したと筆者に述べていた。

３．ロベルジュ先生の遺稿について

ペタール・グベリナ教授

ロベルジュ先生の遺稿論文は, グベリナ教授の教えを忠実に伝えることを目的に, その教えの真髄である「話し言葉」に係わる論理的な考えやその効果について述べたものである。グベリナ教授の先生である *Ferdinand de Saussure* 先生が提唱した, 言語の研究において音声的な分析と構造的な分析を統合した全体構造性のアイデアを, グベリナ教授がさらに発展させ, 欧州, 米国での言語の研究に特別な考え方を啓蒙した。 また, 絶えず話したり, 聞いたりする対話では, 全体の流れで, 身振りや手振りなど眼でみている映像が「ことば」と繋がって意味合いも深くなる。グベリナ教授が提唱した「Sound comes from movement」は正にそれを表したものであると云える。さらに,グベリナ教授は, ほぼ半世紀前に全体構造性（Structure-Global）という概念 [3)]に基づいて, 聴覚・言語障害者の言語教育や外国語教育を実践していた。

ロベルジュ先生が本論文で特に重要であると強調していたことは以下の通りである。

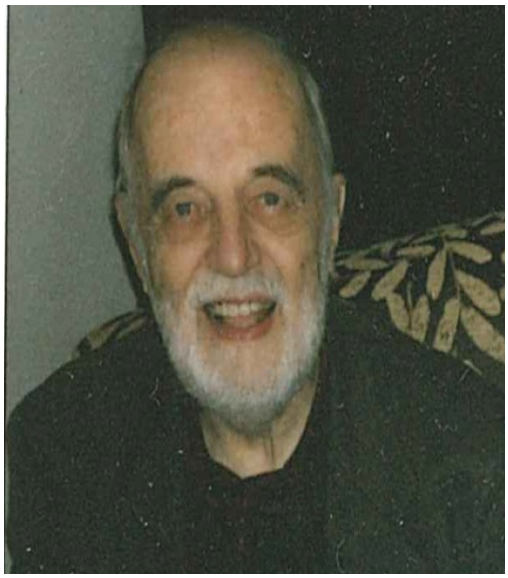
当該論文で構造にグローバルを付けた理由は, 構造的だけであると構造の中身だけに注意が行き全体が見えなくなる恐れがあるからである。従って, 外国語習得の初学生は, 外国語の身振り, イントネーション・リズムなどを含めて覚える必要がある。そのことをグベリナ教授は全体構造性という概念で示している。ロベルジュ先生は上智大学退官後に幼児に対するフランス語教育でグベリナ教授の全体構造性のメソッドを実践し、効果大であることを確認された。

人間の脳は, 1 単語だけで理解するのではなく前後の単語やセンテンスを考慮して話し言葉を理解している。それ

は脳の中で最適化する働きがあり, 話し言葉を理解しているのである。また, 脳は話し相手の言葉のリズム, イントネーションや身振りなどから, 話の内容の場面を想定し, 対話する時にその場面に適した表現を自動的に最適な方法で表現することを選んでいる。従って, 場面を設定することは, 初めて外国語を学ぶ学生にとって重要になってくる。すなわち, 相手が聞き取れるように外国語のリズム・イントネーション, 場面設定をすべて含めた教育をすることが重要である。

表現する側と受ける側が同じ意味合いを持たなければお互いに理解できない。コミュニケーションが取れないことを意味する。人間の脳は自然に相手の表情を見て反応をし, 自動的に修正を加えている。従って, 母国語と同じスピードとリズムで外国語を発声することが重要である。例えで表現すると, このことは音楽を演奏する時にその音楽に適したテンポでないと音楽にならないことと同じである。

次に外国語の教育で大切なことは, 暗記だけではなく伝える相手に対し視覚的な場面をイメージさせ, 2・3 秒後に音声だけを聞かせる。即ち伝える相手に対し, 視覚によるイメージを初めに植え付け、相手にいろいろなことを連想させておいて, 数秒後に感情を表すリズム・イントネーションを伴う発声により, 受講生に判断させる機会が与えられる。これを繰り返し実施することにより, この教育方法に慣れてくると最初のイメージ提供は不要になる。なぜならば脳が訓練されてくるからである。



クロード・ロベルジュ教授

４．まとめ

出会いから 40 年近くお付き合いをさせていただいたクロード・ロベルジュ先生が 2019 年夏, 天に召された。亡くなる直前まで外国語教育のメッソドを後進の研究者に啓蒙する熱意に感動するとともにその生き様を教えていただいたような気がしている。たまたま朝日新聞の 2021 年 2 月 11 日科学季評欄に掲載された山際寿一氏の“コロナ縮む社交の場　文化の力奪うオンライン” [4]に,「人類は長い進化の過程で脳の大きさをゴリラの 3 倍にした。脳が現代人並みの大きさに達したのは言葉が登場する以前であったと考えられている。どんなコミュニケーションが脳を大きくしたのか。それは身体の動きを他者に同調させ、リズムに乗りながら全体を調和させる音楽的なコミュニケーションだ。」 この記事に掲載されている内容は, ロベルジュ先生が後進の外国語研究者に伝えたかったグベリナ教授の理論で述べていることと同一なことであると思った次第である。

本稿は, 人間が持つ素晴らしい能力に基づいたグベリナ教授の理論をロベルジュ先生が実践して得られた成功体験談を筆者なりにまとめたものである。先生が亡くなる 1 週間前に先生のベッドでお会いし, 会話が困難な先生と論文提出の暗黙の約束をしたように感じていた。これで約束を果たすことができたなら幸いである。

ロベルジュ先生との会話の際には, いつも筆者らの心の支えになっていただいたことに今でも感謝している。

参考文献

１） クロード・ロベルジュ, 日本で外国語を教えて 50 年, 上智大学外国語学部紀要, 第 51 号 (2016),pp.39-56.

２） クロード・ロベルジュ, 小川裕花, 河野万里子, ロベ先生とはじめての英語（Mommy’s English Method）, 小峰書店,2010.

３） Guberina.P., *La parole dans la Méthode Structuro-globale audio-visuelle,* Le Francais dans le Monde, n.102,1974,pp.49-54.

４） 山際寿一, 文化の力奪うオンライン, 朝日新聞科学季評欄, 2021 年 2 月 11 日,11 頁.